

山と博物館

第54巻 第6号 2009年6月25日

市立大町山岳博物館

大姥尊像に想う

吉澤 通

富山城主、佐々成政が厳寒の中、アルプス越えをし、野口大出部落に辿り着きました。その時代の、木の年輪等を調べると、その年は、暖冬だったと言え、真冬の山越えは、非常に大変だった事でしょう。守り神として大姥尊像を担ぎ、ただただ無事に着く事を願い、ひた歩いた事でしょう。大出に着いた成政一行は、村の人達に手厚く手当てされ、山越の疲れた体を癒しました。そのお礼とし

て自分達の命を守ってくれた大姥尊像を、寄進して旅立ったのでした。大出の人達は、その像を大切にし、御堂を建て毎年御祭りをして来ました。七年に一度の御開帳には、回向柱を建て大姥尊像と紅白の綱で継ぎ、参拝者に御利益をもたらして来ました。今年はその七年に一度の御開帳の年です。強い信念、粘り強さ、我慢強さ、耐える力を大姥尊像から頂いて下さい。是非大勢の方々の御参拝を世話人一同、お待ちしております。

(大姥堂世話人会代表)



本尊木造大姥尊坐像
(室町時代制作)



回向柱を前に



今年より新大姥小唄が奉納される

鹿島槍ヶ岳の積雪期登攀とアルピニズム

大正末から昭和初期の鹿島槍登山

柳澤 昭夫

アルピニズム誕生

ヨーロッパでは、アルプスは、信仰の対象ではなく、むしろ、山は悪魔の住むところとして恐れられていた。こうした山が、遊びやスポーツの対象として登山されるようになるのは、世界に先駆けて産業革命に成功したイギリスのブルジョワジーが世界旅行とともにアルプス登山にスポーツとして挑戦したのが、近代登山のはじまりと言われている。つまり、ブルジョワジーの一種のステータスとして登山は始まったと言える。もちろん、アルプスを郷土とする地方の人々がアルプスの高峰登山のバイオニアであったことは間違いない。しかし、1850年代に入り、植民地政策に絡んだ冒険精神と産業革命を成功させた社会的繁栄も影響して、高峰のスポーツの登山をリードするのは、世界最古の山岳会を誕生させたイギリスの人々である。登山の黄金時代と言われ



鹿島槍ヶ岳北壁

る、アルプスの高峰初登頂時代は、アルフレット・ウイリスのウェツターホルン（3701m）の登頂に始まり、ウインバーのマッターホルン（4478m）の登頂で幕を閉じる。ついで、処女峰でなくても未踏の山稜や、岩壁を登攀する時代がくる。1882年、ダン・デュ・ジェアン（4013m）双頭峰初登頂までの間を銀の時代を経て、ガイド無しの登山、ピトンやロープを積極的に用いて、鋭い岩峰や岩壁を攀じ登るスポーツ的な登山の時代に入る。

この時代を代表するクライマーが、A・Fマンメリー（現在はママリーと訳されている）（1855～1895）である。マッターホルンのツムット山稜やシャモニー針峰群のエギュ、グレボンの初登攀を行い、コーカサスからナンガルパットに向かい、彼の地に逝った。彼は、初登頂の時代は終わっても、困難な岩壁に無限の領域があり、そこにスポーツ登山の課題を求めた。こうした主張は、登山界にママリイズムとして大きな影響を与えた。ママリイズムは、より困難な岩壁や厳しい積雪期の登山を追求する、アルピニズムとして近代登山の一大潮流になる。

日本における登山が、信仰のために、立山や、御岳に登った講の登山に変わって、遊び、としてあるいは、スポーツとして山登りをするようになったのは、ウェストンらの影響を

受けた明治以降のことである。もちろん、講の登山にも、信仰のためばかりでなく、物見遊山的に楽しむ側面も持っていた。明治以降の登山は、「講」の登山も続いていたし、学術的調査研究登山や測量のための登山が行われるとともに、スポーツ的登山が展開され、日本アルプスの初登頂や積雪期の登頂が展開される。

日本の近代登山は、当時日本に産業技術の指導等で来ていた外国人による日本アルプスの登山やヨーロッパから帰国した人の知識や技術、用具の影響が大きい。同時に、当時の大学山岳部員や日本山岳会員は、「山人」達の支えと山での生活の知恵や経験を学ぶとともに、洋書文献を取り寄せ読み、恐らく手探りで学習した知識や技術によって始まったと言える。

1921年（大正10年）榎有恒は、アルプス中の最も難しいとされていたアイガーの東山稜を初登攀した。世界的にも大きく評価される登攀であるとともに、榎のもたらしたアルピニズム的登山の方向、知識、技術、用具などに関する影響は大きかった。榎の出身である慶応大学山岳部はもとより、日本山岳会や各大学山岳部は、未知な領域での、困難なクライミングを求めるアルピニズムを目指し大きく舵を切ってゆく。日本アルプスの積雪期登山や岩壁のクライミングがアルピニズムの課題として、雪中露営や登攀技術、用具について研究され、ピトンやロープを使う登山が展開された。

その頃、学生登山のバイブルとして読まれていたママリーの「アルプス・コーカサス登山記」の影響を強く受けて、明治時代に始まった近代登山黎明期のピークハントから、早

くも大正末期から昭和の初めにかけて、より峻しい岩壁や岩稜を攀じ登る、ヴァリエーションルートを登攀する登山へと急速な展開をみせる。瞬く間に、夏の穂高、北岳、剣岳の岩壁や岩稜が初登攀され、昭和に入ると早くも積雪期に岩壁や氷雪壁の登攀が試みられる。むしろ、当時の登山が、全てアルピニズム的登山であったわけではない。信仰に關りの深い「講」の登山も植物や地質地形を研究するための登山も行われていた。こうした登山を支えたのは、山を生活の場としていた猟師や岩魚釣りなど「山人」である。ルートを設定し、山を案内し、荷物を運ぶだけでなく、地理、地形、天候、雪崩等に関する蓄積した経験や知識と判断力。山歩きの技術、焚き火や小屋がけの仕方など、山での生活技術や知恵が登山者を支援し、都会から来た登山者に大きな影響を及ぼした。山麓の登山基地となる旅館の営業、小屋の建設、登山道の整備とともに測量が進み、地図や案内書が市販されるようになってきた事情がある。もちろん、当時の近代化政策や、大正デモクラシーの影響は無視できない。

昭和初期の後立山をめぐる積雪期の登山

立教大学（堀田、小原、（人夫・山本、佐々木）は、昭和6年3月20日から4月9日に掛けて宇奈月から、冬の黒部川を40回の渡渉して、新鐘釣から不帰谷を登り、百貫と不帰の間のコルを越え、祖母谷温泉に入る。温泉から南越、餓鬼の田圃を通り、餓鬼谷の岩小屋（小屋掛けして）に入る。そこから東谷尾根を越え東谷に入って小屋掛けをする。ここまで9日を要した。東谷の飯小屋から鹿島槍

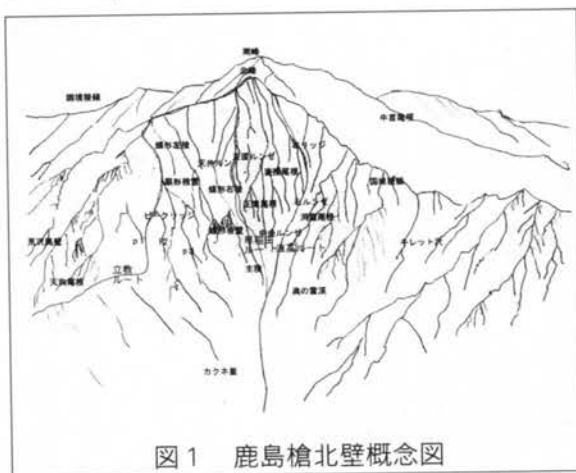


図1 鹿島槍北壁概念図

と五龍に登頂する。まさに積雪期にテントを持たず、粗末な小屋掛けによる、未知なる谷越え、山越えの登山であった。

同年3月26日から4月4日にかけて、京大(伊藤、工楽、長谷川)は、五龍から鹿島槍へ積雪期の縦走し鎌尾根を下る。唐松小屋を利用してはいるが、その先は、烈風の中で壮絶な3晩のツェルトビバークであった。この時、東谷にいてと思われる(五龍山頂で人影と名刺を見ている。)立教(堀田ら)の野営地に逃げ込むことさえ考えている。立教(湯浅、斯波、(人夫・横川))は同じく、昭和7年12月から翌年1月5日に掛けて白馬から爺ヶ岳へ縦走する。猿倉小屋、白馬山頂小屋、唐松小屋、キレット小屋を利用してはいるが、やはり2晩のツェルトビバークを余儀なくされた。

この京大、立教の二つの縦走は強風の吹き荒ぶ後立山の縦走である。ツェルトビバークによる驚異的な記録と言えよう。昨今は、装備やテントは格段に進歩した。にもかかわらず、

縦走を試みるものさえない。

1935年(昭和10年)3月、旧制浪速高校山岳部の今西寿雄、中村英石は、谷口千之吉、吉田達三のサポートを受けて、鹿島槍北壁の初登攀が行われた。遠見尾根にベースキャンプを設け西遠見付近から白岳沢を下りカクネ里に入り、北壁を攻撃した。カクネ里でサポート隊と別れ、雪崩に洗われてカチンカチンの右ルンゼに取り付く。塵雪崩と格闘しながら登攀し、北槍下約130mの主稜線に出た。吹雪の中下降しキレット小屋に入る。翌日サポート隊と合流しカクネ里経由でベースキャンプに帰る。

翌1936年(昭和11年)1月行われた早稲田大学山岳部の主稜の登攀は壮絶でさえあった。早稲田は1934年(昭和9年)12月に第1回目の北壁攻撃を試み、この時は、白岳にキャンプを進めたに終わったが1935年3月には主稜線を縦走してキレットからアタックする予定であったが、悪天候のため、大遠見から落ちる支稜にキャンプを設けて攻撃したが失敗した。1936年の攻撃はなんとしても完登するぞと言うさまざまな闘志を持って行われた。12月31日難波、小林の2名が攻撃するが積雪多量のため、100mほどの登攀で終わる。この日、尾関、山田の2名がキレット小屋にサポート、食料を荷揚げする。

1月2日小西、村田の両名により2回目のアタックが行われた。31日の難波らによる苦闘のラッセルに助けられ順調に進むか見えたが、降雪が始まるとともに、深い雪のラッセルと塵雪崩に苦闘する。頂上下50mほどの傾斜の緩い雪稜上については、午後7時そのままツェルトビバーク。しかし、それから後が大変であった。翌日は吹雪の中、キレット小屋

を目指す。荒れ狂う風雪の中、ルートの判断に苦しみながら午後1時過ぎには、キレットのおりくちに着くがおりくちが分らない。風が収斂して通りぬけるキレットは、すさまじい風雪、困難な通過になった。悪戦苦闘の末までもやキレットの底でビバークになる。その夜はこのほか辛いビバークになった。翌日も吹雪、やつとこのことでキレット小屋にたどり着く。12時を回っていた。そこには、明大山岳部と慶大医学部と人夫がいた。食糧は、サポートが上げた5箱の携行食のみ、彼らの好意に甘えるより仕方がなかった。

1937年(昭和13年)3月には、北岳の登攀で力をつけた東京商大山岳部の小谷部全助と森川真三郎のペアによって、難関、鹿島槍荒沢奥壁北壁が初登攀される。小谷部らは、神城から入山し、今の五龍遠見スキー場、地藏の頭付近にベースキャンプを設け、大遠見に第2キャンプを設け、前進基地とする。そこからカクネ里へ下り、カクネ里をつめ、「く」の字の雪深あたりを登って天狗尾根にて第3アタックキャンプを設けた。天狗尾根から荒沢北俣へ下降し北壁に取り付いた。

アタックキャンプを出発したのは、早朝5時。北壁に取り付いてから、M岩峰まで8時間間かかった。M岩峰の登攀に苦勞し、北壁を登り終え、小屋岩についたのは23時、4時間ほど休憩し、天狗尾根をくだり、アタックキャンプに帰還したのは、翌日の11時30分であった。じつに30時間を越える壮絶な、初登攀であった。

因みに、荒沢奥壁北壁の第2登は18年後の1955年4月である。第2次世界大戦をはさんでいるとは言え、第2登まで、これだけ時間のかかったルートも少ない。今日でも困

難なルートであるが、いかに困難な初登攀であったかを物語っている。

鹿島槍荒沢奥壁南壁を初登攀したのは、昭和16年、浪高、甲南OBの東大(佐谷、伊藤)パーティーである。



図2 荒沢奥壁概念図

アプローチと登攀ルート

昭和初期の鹿島槍の登山は残雪の多い、谷やルンゼにルートがとられている。大冷沢側では西沢、中岩沢、布引沢、北俣本谷、同二ノ沢、同三ノ沢であり、荒沢では本谷南俣、そして北俣、同左ルンゼ、同右ルンゼ、そして、白岳沢、カクネ里である。

多量の積雪を見る鹿島槍周辺の谷は、谷の両側の斜面から落ちる雪崩で、非常に大量のデブリ(雪崩で運ばれ堆積した雪)で埋まる。積雪の安定する四月、五月は雪崩をさけることは比較的容易であり、多くの谷の初登が六月になされていることを見ても、六月になればブロックの崩壊はあってもほとんど雪崩を心配せずすむ。急斜面の雪は雪崩れ落ち、

谷を埋め、多くの谷は最大でも四〇度で比較的傾斜が緩い。したがってデブリに埋まる谷は登りやすく、登頂ルートに設定しやすかったらう。

鹿島槍は、まず、西沢をルートにした。赤岩尾根上部にて、主稜線伝いに登頂している。

そして、本谷と周辺の、中岩沢、布引沢などがルートに取られた。西沢同様山頂へは、主稜線を経由する。最も多く取られたのは、本谷である。残雪が繋がる七月頃までは、山頂への最短時間のルートである。夏になれば滝や岩場も出現し、雪渓は切れるが、例外として北俣本谷三ノ沢をのぞけば、困難な滝や岩場は出現しない。三ノ沢といえども残雪が多く、一箇所出現する滝を除けば、ほとんど七月までは雪で埋められているので登りやすい。しかし、十月の三ノ沢は、いくつもの滝が連続して現れるし、雪渓はズタズタに切れ、不安定なブロックが狭いルンゼに引つかかるように残り、何時崩落するか知れず、危険極まりなかった。本当に彼らはこの谷をアプローチに使ったのか信じがたい。主として、三の沢、二の沢は東尾根へのアプローチとして使われたと共に荒沢奥壁登攀後に下降路として積雪期に使われている。

鹿島槍東尾根の初登攀は、黒部で名高い冠松次郎である。昭和五年八月、大冷沢北俣本谷の二の沢を詰めて、一の沢の頭と二の沢の頭との間に、東尾根から登頂した。下部の樹林帯の藪漕ぎ避けたと言うよりも、沢筋をルートにすることで登頂までのルート全体を把握しやすかったと考えられる。

昭和九年の立教大学山岳部の積雪期初登攀は、東尾根末端からである。東尾根の概要が

明らかになったからである。なお、甲南、立教などは、積雪期も二の沢を下降している。東尾根には、第一岩峰、第二岩峰の難所があるが、第一岩峰手前から、又は、第二岩峰で三の沢へ入り、第一、第二岩峰を左から巻いて南尾根のゴルヘ出ている。また、第二岩峰は右から巻いて本谷ルンゼを登っている。雪崩を見極めなければ取れないルートである。

荒沢最初の滝は左岸の岩棚をへつっている。荒沢の南俣は両側を岩壁にかこまれた狭い谷であるが八月でも残雪が残り、荒沢から東尾根へと登下降されている。現在、南俣はほとんどトレースされないが、情報が少ないことと冬季は雪崩の危険が大ききことによるのらう。今では、情報の多い東尾根が冬季は使われている。

荒沢北俣本谷は荒沢尾根の末端をまわり込んだところで八月以降は連続した七つほどの滝が出現し難儀する。浪高パーティはこの滝を、荒沢尾根側をトラバースして南俣に出て下降している。多くの場合は天狗尾根側のハイマツ伝いに高巻きしている。我々もそうした。この滝の上は荒沢奥壁直下のカールポデン（氷河が削ったお椀のような地形）である。七月頃までは滝もせず全くスムーズに谷を登下降できる。カールポデンを中心に、左ルンゼから東尾根へ、右ルンゼから天狗尾根へと登下降している。（小谷部山日記・三高生の遭難の頁参照）。この時、小谷部らは、荒沢から入山し、上の大滝は、天狗尾根側を高巻きし、カールポデンに出ている。そして、右ルンゼから天狗尾根を登り、山頂から冷池方面に向かう途中、山頂付近で遭難者を発見している。

カクネ里へは遠見尾根から入りやすく浪高

や早大パーティーら多くのパーティーが北壁へのアプローチにしている。小谷部らもカクネ里から天狗尾根に登り荒沢へ下降し奥壁北稜を初登攀した。カクネ里へは大川沢をアプローチにすることも困難ではない。ことに残雪期、四月頃までは荒沢出合からカクネ里まで谷は雪で埋まっている。

カクネ里から後立山主稜線へは口ノ沢、中ノ沢、キレット沢（奥の雪渓はまだ検証していない）、夏でも（八月末でも）残雪の谷をルートにすることができた。当時も今も情報が少ない、未知な領域と言えが残雪の谷はルートを設定しやすかったと言える。

昭和初期、全ての谷や尾根、岩壁が未知の領域で冒険的であった。

だからこそ彼らは、アプローチで、技術を訓練し、状況を判断する力を養い、自分で経験を積み上げていった。その延長上に荒沢奥壁や北壁の登攀が存在した。

最も驚くことは冬季も雪崩が収斂（しゅうれん）するこの谷をアプローチにしたことである。

どこかで雪崩の危険に対する判断力、雪崩を回避する知恵を身につけたのらう。

雪崩に関する多くの科学的知見を手に入れた現在でも、雪崩が出るかも知れないという予測は高めることはできたが、依然として雪崩は出ないという確信は得られないまま谷底へ下降し岩壁に取り付いている。科学的な予測というよりも雪崩の観察、多くの冬山経験の集積による「勘」で状況を判断している。全く彼らと同様である。彼らは恐れを知らない、恐いもの知らずの無鉄砲なクライマーではない。むしろ知的で文献を読み、一步一步経験を積み重ねた、極めて慎重なクライマー

であった。未知の本谷、荒沢、カクネ里をアプローチにして、鹿島槍周辺のこの谷を登り降りする過程で、力を高めていったのらう。（大町山岳博物館 館長）

企画展 「アルビニズム誕生 昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史」 関連イベントのお知らせ

企画展開催日 平成21年7月4日(土)～8月30日(日) 企画展開催時間 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで) 会場 山岳博物館 企画展示室・ホール 観覧料 大人400円 高校生300円 小・中学生200円 関連催し 企画展講演会：7月19日(日) 午後1時30分～3時30分 於：博物館講堂 ※聴講は通常入館料がかかります。 講師 柳沢昭夫(大町山岳博物館館長) 演題 「鹿島槍・荒沢奥壁の冬期初登攀」

鹿島槍ヶ岳現地見学会① 「小遠見からカクネ里を望むトレッキング」 平成21年7月25日(土) ※雨天の場合は8月1日(土)に 応募人数 20人程度 料金1600円(天立)

鹿島槍ヶ岳現地見学会② 「本谷、西段、中岩沢トレッキング」 平成21年8月22日(土) ※雨天の場合は中止 応募人数 20人程度 料金無料 ※トレッキング①②の申し込み・詳細内容は博物館までお問合せください。先着順で、定員になり次第締め切ります。

企画展解説：7月4日(土)、5日(日)、12日(日)、18日(日)、20日(日)、26日(日)、8月2日(日)、9日(日)、16日(日)、23日(日)、30日(日)のそれぞれ午前10時30分～と、午後2時30分～の1日2回行います。

山と博物館 第54巻 第6号 発行 長野県大町市大町八〇五六一 山と博物館 395-0002 市立大町山岳博物館 TEL 0267-2110111 FAX 0267-2111111 E-mail: smp@city.yamanouchi.nagano.jp URL: www.city.yamanouchi.nagano.jp/smp 印刷 大糸タイムス株式会社 定価 年額一、五〇〇円(送料含む)(切手不可) 郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七一一三三

